

「ブルース」

—二稿—

2025/07/13

さいの

〈人物表〉

北川 莉子きたがわ りこ

(23)

スーパーの社員

山崎 愛子やまざき あいこ

(55)

莉子の同僚のパート

岡村 北斗おかむら ほくと

(58)

莉子の働くスーパーの店長

1. コンビニ・店内（夜）

北川莉子（23）、あくびを噛み殺しながら陳列棚から鮭おにぎりを取る。眠そうな顔。

2. 莉子のアパート・室内（夜）

電気の消えた室内。壁掛け時計の秒針の音。
莉子、ベッドの上で横になっている。

寝ているかと思いきや、静かに目を開ける。
うっすらと、壁越しに男の歌い声が聴こえる。

ブルース調の曲。

莉子 「……」

聴くまいと、布団を被って固まる。

3. スーパーマーケット・店内（朝）

開店前の店内。岡村北斗（58）、カートに乗せた商品を次々と棚の前に運んでいく。

山崎愛子（55）、商品を棚に陳列している。

莉子、今やってきたばかりという格好で岡村に駆け寄って、深々と頭を下げる。

莉子 「……すいません」

岡村 「またかお前」

横目で見ている愛子、あちゃー、という顔。

4. スーパーマーケット・控え室（朝）

制服のエプロン姿に着替えた莉子と愛子、座って水を飲んでいて、

莉子 「早めに寝るようにはしてるんですけど」

愛子 「でも駄目なんだ」

莉子 「なかなか寝付けなくて」

愛子 「……？」

岡村 「ほら。開店準備お願いね」

と、控え室のドアを開ける。

愛子 「はい」

と、急いで店内に戻る。

5. 莉子のアパート・外観（夜）

木造二階建ての古びたアパート。

6. 莉子のアパート・室内（夜）

莉子、ベッドに寝転がってスマホをいじっている。
一息ついて、

莉子 「……六時半、六時半、六時半」

と、電気を消して、目を瞑る。

× × ×

うっすらと、壁越しに男の歌い声が聴こえる。

莉子 「（小声で）……うっせー」

莉子、開けていた目をぎゅっと瞑る。

7. スーパーマーケット・控え室（昼）

愛子と莉子、座って弁当を食べている。

愛子、イヤホンを付けて音楽を聴いている。

莉子 「愛子さん、愛子さん？」

愛子、話しかけられているのに気づいて、イヤホン
を外して、

愛子 「え？ 何？」

莉子 「音楽、詳しいですよね？」

愛子 「……まあ、そこそこ？」

莉子、鼻歌を奏で始める。

愛子 「……？」

莉子 「……知ってます？」

愛子 「知らない。何の曲？」

莉子 「分かりません」

愛子 「何それ。うろ覚えってこと？」

莉子 「そんな感じです。なんか分かりません？」

愛子 「いや分かんないよ。そんだけじゃ」

莉子 「（詳しいって言ったのに）そっかあ……」

愛子 「いや、なんか他に覚えてないの？ 歌詞とかさ」

8. 莉子のアパート・室内（夜）

電気の消えた室内。莉子、ベッドに横になっている。
莉子 「……六時半、六時半、六時半」

と、すぐに男の歌い声が聴こえ始める。
莉子、舌打ちして目をぎゅっと瞑るが、思いついたように再びパツと目を開く。
机の上の水の入っていたコップを飲み干す。
コップの飲み口を壁に押し当て、耳をあてる。

莉子 「……」

男の歌い声が、少し鮮明に聴こえる。
莉子、聴きながらスマホでメモを取る。

莉子 「か、が、や、く、あ、な、た、の？」

9. スーパーマーケット・控え室（昼）

愛子、莉子のスマホ画面を見ていて、

愛子 「ググってもキリないよ。（軽く歌って）『かがやくあな

たの』だけじゃ」

莉子 「だから聞いてんだけどなあ」

愛子 「……これかかったのは何曲かあるよ。ブルースだろうね」

莉子 「本当ですか？」

二人、笑い合う。

と、通り掛かった岡村、わざとらしく咳払い。

二人、はたと静かにする。

愛子 「（小声で）つーかあんだ、明日もやったらマジヤバイよ」

莉子 「……」

10. 莉子のアパート・室内（夜）

莉子、電話していて、

莉子 「はい、前にも大家さんから言ってもらったんですけど、
まだやめてもらえてなくて。あの、本当に困ってて……」

× × ×

電気の消えた室内。莉子、ベッドに横になっている。
男の歌い声が聴こえ始め、ぎゅっと目を瞑る。

莉子 「……っさいな」

が、耐えかねて、ドンツと壁を足で蹴る。
莉子、やってしまったという顔で、ハツとする。
歌い声は止まる。

固まっている莉子、音を立てないようにそつと、机の上のコップを壁に押し当てて、耳をあてる。

壁の向こうからは、何も聴こえない。壁掛け時計の秒針の音と、押し殺した自分の息だけが聴こえる。

11. 莉子のアパート・室内（朝）

莉子、ハツと目が覚める。壁掛け時計は六時四十五分。飛び起きて、身支度をする。

12. 莉子のアパート・玄関前（朝）

莉子、急いで靴を足に引っ掛けて、バツと玄関から飛び出る。屈んで靴を踵まで引っ掛けたり、つま先を床にトントンとしたりしている。

ふと、隣室の玄関ドアがゆっくりと開いて、ドアと床の隙間から男の足が見える。

驚いて莉子、咄嗟に部屋の中に引き返す。

13. 莉子のアパート・室内（朝）

莉子、息を押し殺して玄関ドアの裏で固まっている。
隣室の玄関ドアがゆっくり閉まる音。

しばらくしてやり過ごしたかと思い、音を立てないようにそつと立ち上がり、一息つく。

途端にガコンっという、ドアポストに何か入る音。

莉子、しばらく固まる。

14. スーパーマーケット・控え室（昼）

莉子、控え室の棚から古びたラジカセを取りだす。

愛子 「……寝付けるようになった？」

莉子 「はい、もう大丈夫です」

愛子 「枕でも変えた？」

莉子 「いえ、引越すことにしたんで」

愛子 「え？」

莉子 「隣、ヤバい奴なんで」

愛子 「……どういこと？」

莉子の手には、カセットテープ。

莉子 「答え合わせしましょうよ」

愛子 「？」

莉子、テープを入れて再生。

音質は良くない。歌だけのブルース調の曲。

ラジカセの音「かがやくあなたの」

二人、笑みを交わす。

莉子 「合ってました？」

愛子 「いや？」

ラジカセの音「おにぎり選ぶ顔」

莉子 「……？」

ラジカセの音「一昨日鮭で、昨日は昆布、今日は何を選ぶんだろ」

莉子、停止ボタンを押す。

テープが吐き出される。

愛子 「（爆笑して）何この曲」

莉子 「……」

愛子 「（カセットを見て）あ、そういうこと？」

莉子 「……？」

愛子 「え、今の子達の間でも流行ってんの？ 懐かしい」

莉子 「何が、ですか？」

愛子 「若い頃さ、テープにこうやって『FOR YOU』って

書いて、曲入れてラブレター代わりにしてたの」

と、テープを手にとって眺める。

莉子 「……」

（おわり）